

FD NEWS



No. 35 2013年3月25日
摂南大学 FD委員会

〒572-8508 寝屋川市池田中町 17-8
TEL: 072-839-9106
E-mail: kyomu@ofc.setsunan.ac.jp

Smart and Human

常翔学園

摂南大学

授業アンケートの改訂に携わって

SG1 グループ・リーダー 経営学部 有馬善一

FD委員会が発足11年目の2012年度、期せずしてSG1のグループ・リーダーとアンケート改訂の仕事が回ってきた。これにまつわる所感を披露して巻頭言の責を塞ぐこととした。

2011年度の「FD News No. 33」に詳細な分析報告がなされているが、授業に対する学生の「総合満足度」は、2009年に平均3.8に到達してから、ほぼ「安定」している。また、総合満足度が「教員の熱意」「話し方」「内容を理解させる工夫」と高い相関関係を示しているという点も繰り返し指摘されてきた。しかし、これらのデータはあくまでも数値データである。同じFD Newsの報告の中にあるように、アンケートの評価値によって担当科目の「位置づけ」は分かっても、「何が良かったのか・良くなかったのかは自分では確証をつかめぬまま、次期の授業でまた暗中模索することを強いるものでもある」という指摘は正鵠を得ていると思われる。

そこで田中FD委員長からアンケート改訂の任を課せられたSG1としては、アンケートの「実質化」を図るということを目標に置いた。平たくいえば、何が良かったか、悪かったかを学生に聞こうという発想である。抽象的な数値よりも具体的な記述に重点を置く。評価としては「総括的評価」よりも「形成的評価」を重視する。後は、質問項目の精査と絞り込みをする。これは学生の負担感の軽減とマンネリ化の予防のためである。さらに、学生の声聞く以上は、学生に対するフィードバックもきちんとなさなければならない。その体制作りもアンケート実施の重要な要素となる。

大まかな枠組みの合意に至るまではそれほどの困難はなかった。ところが、議論を重ねていくうちに明らかになったことは、質問項目の取捨選択がなかなか大変であるということである。オブザーバー（実質的なメンバーであるが）の田中委員長を加えてSG1のメンバーは文系・理系の7学部を網羅している。どの項目が必要か・不必要かという判断には、各学部の教育目標や学生に対して何を求めるかといったことが色濃く反映している。そのため熱い議論が交わされたが、なかなか一つの案にまとまらない。というよりも、議論を交わしていくうちに、各学部・学科の事情がかなり異なっているということが判明したというのが実情である。記述式アンケートの導入に見られるように、やんちゃな学生に対してははじめを求める必要のある学部と、まず学生とフレンドリーな関係を築いた上で受験勉強に邁進させる必要のある学部とでは、アンケートに求めるものも違ってくる。

それでも何とかアンケートが一つの案としてまとまったのが11月下旬。これに対して

各学部・学科の FD 委員からの賛否両論の意見をいただいた。これを受けて質問項目や前文の見直しをして 2 月の FD 委員会でアンケート改訂案が了承された。学部独自の項目の追加や今後に必要な見直しを行うことも合わせて了承された。

一見すると、項目数が減って記述が増えただけのように見える今回のアンケート改訂案であるが、ここに至るまでには長時間の議論とボツになったいくつもの案があった。苦労をともにした SG1 のメンバーと田中委員長、それと事務方としてサポートをいただいた教務課渡川係長にこの場を借りて厚く御礼を申し上げる次第です。

2012 年度後期「学生による授業アンケート」実施結果の報告

FD 委員会 SG1

I 実施状況

2012 年度後期の「学生による授業アンケート」は、2012 年 11 月 26 日(月)～12 月 8 日(土)の 2 週間にわたって実施された。今回のアンケートでは、FD 委員会の承認のもとで前期に引き続き、試験的に経営学部と法学部において記名式アンケートが実施された。記名式アンケートが導入された 2011 年度後期の時点では、全学部・学科同一条件で実施されたアンケート結果を互いに比較することによって得られるメリットを半減させるとの意見もあったが、授業改善は教員のみならず学生の責任ある主体的参加によって行なわれるものであるとの認識が共有されたことが背景にある。

実施対象科目は、これまでと同様に後期に開講している全授業科目とした。ただし、卒業研究と履修者が 10 名以下の授業、ゼミおよび演習・実験科目は対象外とされた。原則として回収と学部事務室(または教務課)への提出は、受講している学生に依頼した。

アンケート結果の全体的な集計と分析法は、過去の整合性を考慮しこれまでと同様の方法で行った。ただし記名式アンケートを実施した 2 学部については、昨年度後期、今年度前期と今回の記名式アンケートの比較を別途行った。これに関しては、〈IV 記名式アンケート結果の分析〉で紹介する。

集計結果の報告は、昨年度と同様に、①各授業担当者への結果報告、②各学部・学科への結果報告、③FD ニュース等による学内での結果報告、④公開希望科目については摂南大学ホームページで期限限定かつ学内閲覧のみでの公開、を行うこととした。また学生による自由記述欄に寄せたコメントと教員による回答は、学部・学科ごとの「取り扱い方法」によって整理され、各教員にメール等により配信されることになっている。

なお以下に報告される集計結果について、〈II アンケート結果の概要〉では、学部・学科の開講する科目群でまとめられ、複数学部にまたがる授業科目のデータは除外されている。また〈III アンケート結果の分析〉では、教員が特定されないことに配慮し、従来のカテゴリー区分の一部を変更した。最後に〈IV 記名式アンケート実施結果〉では、2 学部で行われた記名式アンケート結果に関する分析が質問項目ごとに報告されている。

II アンケート結果の概要

「前期授業アンケート実施結果報告」と同様に、以下の 9 項目にわたる質問について、質問ごとにその特色を示す。文中で用いた相関係数はすべてピアソン式である。

なお、学科・学部の日本語名とアルファベットは次のように対応する。

C 都市環境工学科	A 建築学科	E 電気電子工学	M 機械工学科
B マネジメントシステム工学科	V 生命科学科	R 住環境デザイン学科	
L 外国語学部	I 経営学部	Y 薬学部	J 法学部
N 看護学部			W 経済学部

(1)質問1：この授業にどの程度出席しましたか

100%出席したと回答した学生が圧倒的に多く（全体の 54.3%）、次いで 80~100%出席した学生が多い（全体の 34.9%）。したがって、約 9 割の学生が 8 割以上出席したことになり、前期とほぼ同様の結果が得られた。また、全学部・学科の平均値も、4.41 を示し、各授業ともきわめて出席率が良いという結果となった。この点についても、前期と同様、アンケートの実施日が講義回数の 10 回~11 回目にあたるため、出席率の良い学生が定着していたことが関係していると思われる。

表 2-1 出席状況

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	N	計
40%未満	12	17	13	14	6	2	5	29	31	42	30	20	7	228
40~60%未満	11	11	12	7	5	5	8	90	103	54	111	65	6	488
60~80%未満	89	95	78	128	49	54	74	717	587	302	544	514	54	3,285
80~100%未満	530	520	739	698	282	422	424	2,295	2,440	1,149	1,790	1,423	246	12,958
100%	1,552	955	1,200	2,012	360	835	559	2,194	2,378	3,887	1,656	1,471	1,093	20,152
平均	4.64	4.49	4.52	4.64	4.40	4.58	4.42	4.23	4.27	4.62	4.19	4.22	4.72	4.41

(2)質問2：この授業に意欲的に取り組みましたか

全学部・学科の平均値は、3.92 で、「そう思う」と「強くそう思う」の割合が高い。なかでも、C 科と L 部とともに、I 部と N 部も平均値が 4 を越えた。わずかではあるが、前期以上に意欲的であるという結果が認められる。

表 2-2 取り組み状況

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	N	計
全くそう思わない	39	28	43	44	13	14	20	57	44	122	40	71	36	571
あまりそう思わない	56	43	107	99	23	67	41	163	223	247	153	196	61	1,479
どちらともいえない	410	380	582	803	168	321	257	1,069	954	1,346	973	1,098	260	8,621
そう思う	954	712	867	1,218	301	617	476	2,280	2,679	2,117	2,020	1,494	483	16,218
強くそう思う	731	435	443	691	195	299	276	1,747	1,635	1,586	942	627	560	10,167
平均	4.04	3.93	3.76	3.85	3.92	3.85	3.89	4.03	4.02	3.89	3.89	3.69	4.05	3.92

(3)質問3：この授業の事前・事後学習課題をしましたか

この質問に関しては、全学部・学科の平均値が 3.22 と、前期同様、低い値を示している。「時々した」が最も多く、続いて「よくした」、「大変よくした」の順になる。後期においては、全学部・学科で平均値が 3 を越えており、前期より改善がみられた。授業の事前・事後学習の必要性については、教員・学生ともに周知されるようになった結果、取り組み姿勢が変化してきた現れと思われる。

表 2-3 事前・事後学習課題

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	N	計
まったくしなかった	125	114	166	461	92	149	133	454	577	710	430	332	195	3,938
あまりしなかった	195	145	271	436	97	193	142	565	935	756	712	553	200	5,200
時々した	612	578	785	984	253	475	327	1,597	1,756	1,928	1,547	1,398	458	12,698
よくした	726	463	551	602	155	341	276	1,505	1,364	1,241	995	834	274	9,327
大変よくした	534	297	270	371	103	162	188	1,189	898	793	447	372	274	5,898
平均	3.62	3.43	3.24	3.00	3.11	3.13	3.23	3.45	3.19	3.12	3.08	3.10	3.17	3.22

(4)質問4：この授業の到達目標を達成できましたか

全学部・学科の平均値は 3.66 を示し、前期の平均値より 0.08 ポイント上昇した。「どちらともいえない」と「そう思う」の割合がどちらも 36%あり、「到達目標」に対する理解がわずかではあるが深まったように思われる。ただし「到達目標」の意味が今ひとつあいまいなため、学生にどのように理解させるのか検討する必要がある。

表 2-4 到達目標

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	N	計
全くそう思わない	54	33	60	77	11	17	24	84	73	126	51	64	68	742
あまりそう思わない	97	67	140	159	28	89	59	235	290	309	169	217	90	1,949
どちらともいえない	710	655	898	1,226	264	552	413	1,501	1,714	2,086	1,547	1,593	512	13,671
そう思う	824	559	662	930	264	477	357	2,061	2,278	1,863	1,687	1,198	383	13,543
強くそう思う	505	283	280	464	133	185	216	1,435	1,181	1,042	665	418	348	7,155
平均	3.74	3.62	3.47	3.54	3.69	3.55	3.64	3.85	3.76	3.62	3.67	3.48	3.61	3.66

(5) 質問 5 : この授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか

全学部・学科の平均値は 3.90 と前期の平均値より 0.07 ポイント上昇した。「そう思う」が 40.8%、「どちらともいえない」が 28.3%、「強くそう思う」が 27.2% となり、68% の学生が「シラバスの内容に沿って行われた」と認識しているようである。一方、「あまりそう思わない」が 2.2%、「全くそう思わない」が 1.4% と低い値を示すことから、おおむねシラバスの内容どおりに授業が行われていると判断される。

表 2-5 シラバスの内容

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	N	計
全くそう思わない	51	31	50	76	9	9	21	54	39	65	31	46	35	517
あまりそう思わない	50	46	59	80	12	32	31	99	106	93	70	84	43	805
どちらともいえない	573	570	669	1,071	235	427	347	1,141	1,184	1,610	1,041	1,215	416	10,499
そう思う	870	619	843	1,031	279	583	389	2,097	2,373	2,130	1,992	1,477	455	15,138
強くそう思う	644	333	424	593	164	268	282	1,927	1,837	1,531	1,000	669	450	10,122
平均	3.92	3.74	3.75	3.70	3.83	3.81	3.82	4.08	4.06	3.92	3.93	3.76	3.89	3.90

(6) 質問 6 : この授業の担当教員から授業に対する熱意を感じましたか

全学部・学科の平均値は 3.98 で、前期より 0.06 ポイント上昇した。「そう思う (41.3%)」、「強くそう思う (31.8%)」を選択した学生が多く、73.1% の学生が教員の熱意を感じているようである。平均値が 4 を越えた学部も、L 部、I 部、Y 部、J 部と 4 学部になった。

表 2-6 教員の熱意

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	N	計
全くそう思わない	59	42	71	94	9	11	24	72	87	96	40	71	55	731
あまりそう思わない	91	64	86	158	28	34	43	104	177	168	102	132	72	1,259
どちらともいえない	483	465	576	914	180	314	269	794	887	1,078	734	969	302	7,965
そう思う	895	638	810	1,073	291	608	394	1,995	2,503	2,173	1,980	1,489	473	15,322
強くそう思う	662	389	501	612	190	351	340	2,357	1,883	1,918	1,281	827	504	11,815
平均	3.92	3.79	3.77	3.68	3.90	3.95	3.92	4.21	4.07	4.04	4.05	3.82	3.92	3.98

(7) 質問 7 : この授業の担当教員は、授業内容を理解させるための工夫をしていましたか

全学部・学科の平均値は 3.89 で、前期と比較して 0.07 ポイント上昇した。この質問については、L 部と I 部が平均値 4 を越えている。質問 6 と質問 7 間の相関係数は 0.80 を示しており、強い相関関係が認められる。

表 2-7 理解させる工夫

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	N	計
全くそう思わない	92	59	91	134	13	22	33	96	119	151	50	104	88	1,052
あまりそう思わない	114	75	153	181	34	55	54	156	231	269	144	212	93	1,771
どちらともいえない	540	497	598	926	192	325	286	876	983	1,172	812	1,016	310	8,533
そう思う	833	611	760	1,046	273	600	395	1,944	2,422	1,985	1,936	1,403	442	14,650
強くそう思う	609	357	443	566	185	316	301	2,248	1,783	1,853	1,193	756	472	11,082
平均	3.80	3.71	3.64	3.61	3.84	3.86	3.82	4.15	4.00	3.94	3.99	3.71	3.80	3.89

(8) 質問 8：この授業の担当教員の話し方は、明瞭でわかりやすかったですか

全学部・学科の平均値は 3.85 で、前期結果より 0.08 ポイント上昇した。この質問に関しても、L 部と I 部で平均値は 4 を越えている。質問 7 と質問 8 の相関係数は 0.86 で、強い相関関係を示している。

表 2-8 教員の話し方

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	N	計
全くそう思わない	102	73	101	168	15	22	39	113	140	188	62	128	96	1,247
あまりそう思わない	136	84	177	223	38	75	59	188	290	348	157	239	91	2,105
どちらともいえない	511	503	629	943	189	313	288	858	969	1,196	805	1,022	338	8,564
そう思う	839	597	698	959	268	591	384	1,931	2,313	1,955	1,919	1,331	415	14,200
強くそう思う	595	340	436	557	188	318	300	2,225	1,823	1,743	1,191	768	466	10,950
平均	3.77	3.66	3.58	3.53	3.83	3.84	3.79	4.12	3.97	3.87	3.97	3.68	3.76	3.85

(9) 質問 9：総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか

全学部・学科の平均値は 3.90 で、前期より 0.07 ポイント上昇した。L 部が 4.13 と最も高く、次いで I 部 4.06、J 部 4.00 と 3 学部で平均値 4 を越えている。これら 3 学部は、質問 6～8 の平均値がいずれも高い値を示していることから、満足度も高かったものと判断される。

質問 9 と質問 6 の相関係数は 0.70、質問 9 と質問 7 の相関係数は 0.79、質問 9 と質問 8 の相関係数は 0.80 を示し、いずれも 0.70 を超えており、強い相関関係が認められる。

表 2-9 総合満足度

	C	A	E	M	B	V	R	L	I	Y	J	W	N	計
全くそう思わない	84	57	97	131	18	30	38	122	102	186	64	114	95	1,138
あまりそう思わない	100	70	111	161	23	64	52	173	210	251	124	163	95	1,597
どちらともいえない	525	516	676	975	202	371	297	872	942	1,175	832	1,091	296	8,770
そう思う	820	570	715	946	258	562	385	1,857	2,303	1,936	1,842	1,327	419	13,940
強くそう思う	646	381	444	626	195	290	294	2,292	1,979	1,879	1,259	784	500	11,569
平均	3.85	3.72	3.64	3.63	3.85	3.77	3.79	4.13	4.06	3.93	4.00	3.72	3.81	3.90

「総合満足度」について、2002 年度からの経年変化を示すと図 2-1 のようになる。2006 年度から伸びが鈍化し 3.80 台が上限であったが、今年度後期に初めて 3.90 台を示した。継続したアンケート調査の実施とその結果公表、自由記述欄への回答等が、授業改善にわずかにではあるが繋がっているものと思われる。

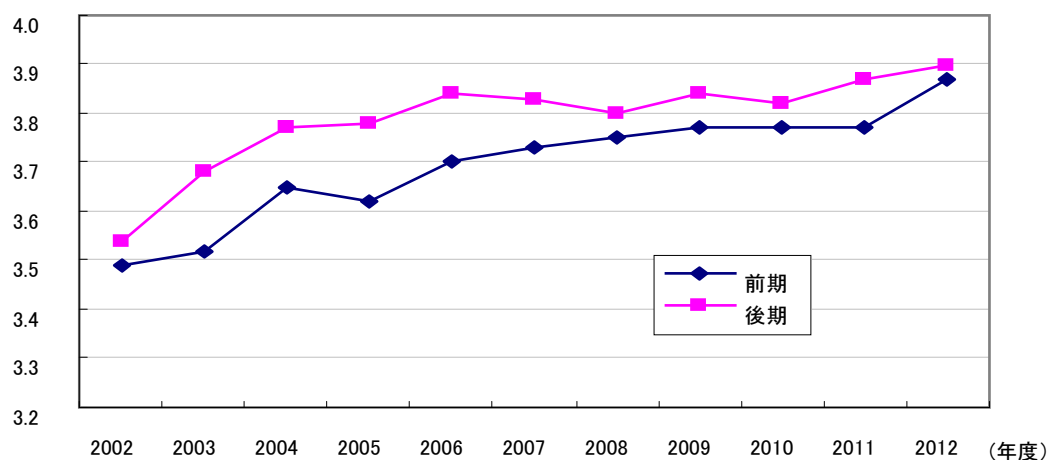


図 2-1 総合満足度の経年変化

III アンケート結果の分析

学生の授業「満足度」(質問 9)と、(1)履修者数による授業規模、(2)担当教員の年齢、(3)担当教員の職階、(4)授業時限、(5)必修・選択の別、(6)科目の分野の別の 6 つの観点

から、違いがあるかをみてる。2012年度前期における分析方法と同様に、学部・学科別の結果は表示せずに、各観点に対する全体の平均値を折れ線あるいは数値で表示している。また、2011年度後期と2012年度前期のデータも今回の結果と並列して示している。ただし、図3-6の科目の分野と満足度には2011年度後期、2012年度前期の結果を示し、最後の(7)の表3には、質問項目間のピアソンの相関係数を今回と前回(2012年度前期分)のデータを併記している。

(1) 授業規模と満足度

全学部・学科の平均値は3.89である。全体の傾向として授業規模が大きくなるにつれて満足度が低くなり、受講者数が80人を超えると平均値または平均値を下回る傾向がある。満足度が平均化していることは、授業の規模に関わらず授業の質が保証されていることにつながると考えられる。また、20人未満の小人数クラスの満足度が高いことは、個別対応に近い授業が提供されていると考えられ、授業規模の大小を問わず、教科の特性を反映していることが伺える。

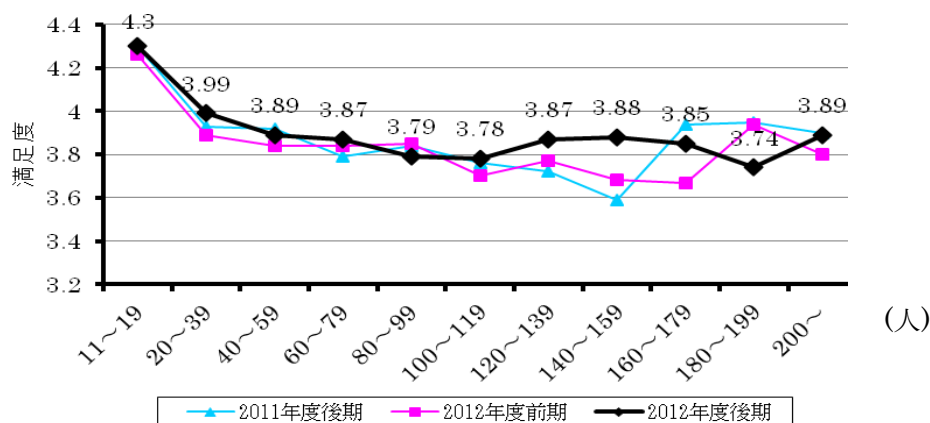


図3-1 授業規模と満足度

(2) 教員の年齢と満足度

全般的には、これまでの結果と同様に、学生の年齢と比較的に近い担当教員の授業の満足度が高い傾向が感じられる。しかし、このように年齢階級を分割すると、母集団の数が少なくなり統計的な信頼性が損なわれる可能性がある。さらに、各学部・学科の教員数と年齢構成を考慮すると、このデータの取り扱いには注意が必要である。

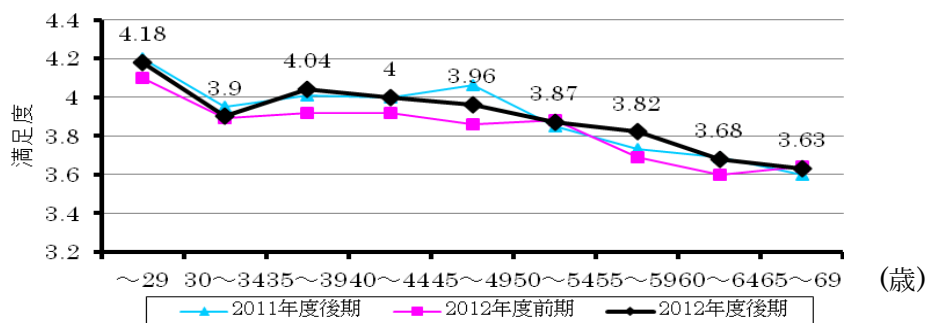


図3-2 年齢と満足度

(3) 教員の職階と満足度

全体の平均値は3.89である。各学部・学科の同じ職階間の満足度に多少のバラツキがあるのですが、職階と満足度に有意な差があるとは見られない。なお、下図には、専任講師に一部助教が含まれている。

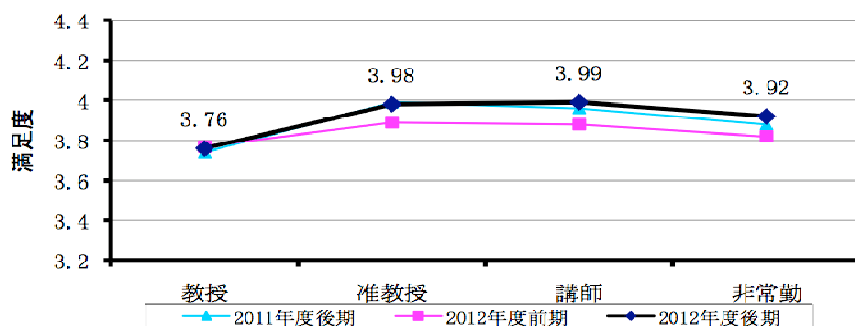


図3-3 職階と満足度

(4) 授業時限と満足度

全学部・学科の平均値は 3.89 で、授業時限による満足度の差はほとんどみられない。

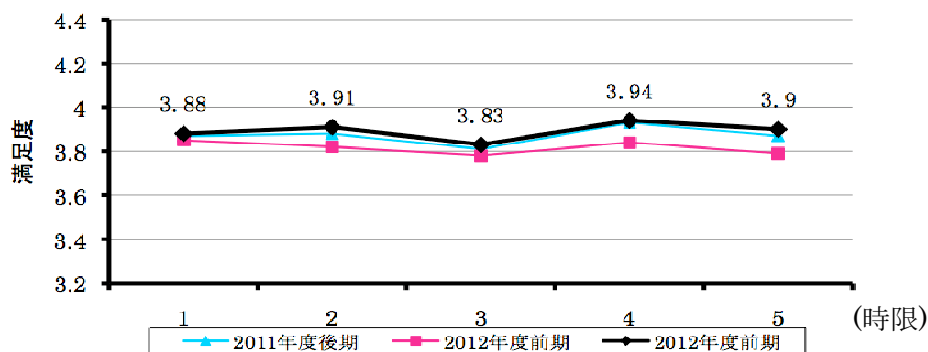


図3-4 授業時限と満足度

(5) 必修・選択の別と満足度

必修科目より選択科目の満足度が若干高い傾向は見られるが、満足度に差があるとは言えない。

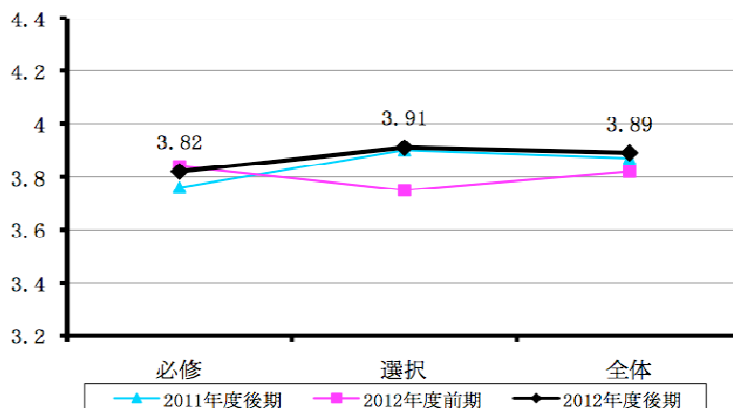


図3-5 必修・選択の別と満足度

(6) 科目の分野の別と満足度

全体として、「専門」、「専門関連」、「基礎」、「教養」の満足度は、経年的にみても、分野別にみても大きな差はないと言える。

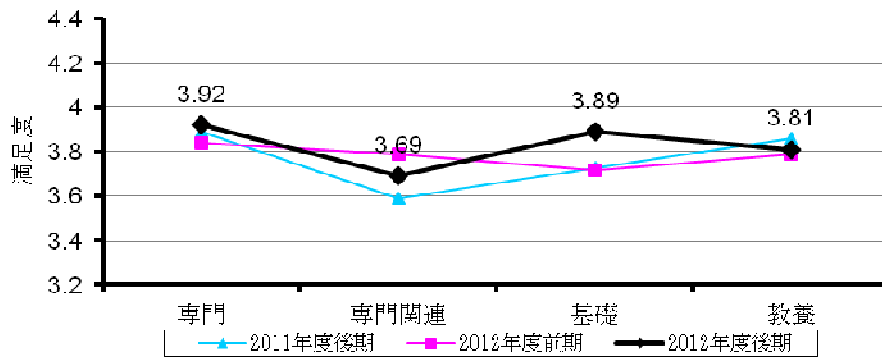


図3-6 科目の分野と満足度 年次比較(教職・キャリア除く)

(7) 質問項目間の相関

各質問間の相関を分析するためにピアソンの相関係数を求めて、各値を表に示している。表の上段には今回のアンケート結果で得られた相関係数の値を、下段の括弧の中には前回(2012年度前期)の結果による値を記載している。表の上下の値はほぼ同じで今回と前回の相関が同傾向であると考えられる。満足度と質問6の「教員の熱意」、質問7の「理解させる工夫」および質問8の「教員の話し方」はそれぞれ0.75、0.80、および0.81で、かなり高い相関があることが分かる。また、「質問6」、「質問7」および「質問8」相互の相関係数の値(0.77~0.85)はかなり高く、これら3つの設問が学生の満足度を高める要因であることが今回の結果からも明らかである。

表3 各質問間の相関係数

	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9
質問1	1	0.38 (0.32)	0.21 (0.16)	0.25 (0.18)	0.21 (0.15)	0.19 (0.16)	0.17 (0.13)	0.16 (0.11)	0.19 (0.14)
質問2		1	0.51 (0.47)	0.62 (0.59)	0.52 (0.49)	0.53 (0.51)	0.54 (0.51)	0.53 (0.50)	0.60 (0.57)
質問3			1	0.56 (0.54)	0.41 (0.38)	0.35 (0.33)	0.38 (0.35)	0.38 (0.35)	0.41 (0.37)
質問4				1	0.66 (0.64)	0.59 (0.56)	0.60 (0.58)	0.60 (0.57)	0.63 (0.60)
質問5					1	0.70 (0.66)	0.67 (0.64)	0.65 (0.61)	0.65 (0.62)
質問6						1	0.81 (0.81)	0.77 (0.76)	0.75 (0.73)
質問7							1	0.85 (0.84)	0.80 (0.79)
質問8								1	0.81 (0.80)
質問9									1

上段 : 2012年度後期
下段(): 2012年度前期

IV 記名式アンケート結果の分析

記名式アンケートは経営学部および法学部の開講科目において 2011 年度の後期から継続して実施されているので、今期で、後期開講科目については 2 期分、前期も含めると 3 期分のデータが揃ったことになる。この間、全学 FD 委員会 SG1 では授業アンケートの「記名効果」を検証し、『FD News』No. 33 (2012 年 3 月発行) では経営学部と法学部における過去 (無記名式) と現在 (記名式) との差を、また『FD News』No. 34 (2012 年 11 月発行) では同様の検証に加え、無記名式を続けてきた他の 10 学科における 2011 - 2012 年度間の変動差との比較を、それぞれ報告してきた。それによれば、「記名効果」はあったとのことである。

なお、本節でいう「記名効果」とは、記名がアンケートの回答者に与える心理的影響により評価値が(有意な)変動差をもってあらわれることを指す(『FD News』No. 33, p. 14)。

さて、今年度、FD 委員会では SG1 が中心となり、授業アンケートを改訂する作業を進めてきた。このまま進めば、2013 年度には新しい設問・様式を備えた授業アンケートが導入されることになる。したがって、現行の設問・様式による「記名効果」の検証は今期が最後となる。

そこで本節では、次の点を課題とする。すなわち、①経営学部および法学部の後期授業アンケートの結果を 2010 年度から 2012 年度の 3 期にわたって比較すること、②同じく経営学および法学部の記名式アンケートの結果を 3 期にわたって比較すること、③①および②と同時期の他学科における無記名式アンケート結果を①ならびに②とそれぞれ比較し、「記名効果」を検証すること、である。方法は『FD News』No. 33 で行ったものと同様であり、各期の授業アンケートの質問項目 (A1~A9) の各平均値の差を検定する。表中の数値は、各期における各質問項目の平均値、およびそれらの変動差 (マイナスは平均値の低下を意味する)、さらにその変動差の統計量である。統計量の絶対値が 2~4 であれば変動差について弱い有意性が認められ、同じく 5~7 ならば強い有意性が認められ、8 以上はかなり強い有意性が認められることを意味する。

(1) 2010・2011・2012 年度後期授業アンケート結果の比較

まず表 4-1、表 4-2 で、2011 年度後期と 2012 年度後期の間の変化 (12-11 差統計量) をみてみよう。

経営学部では、A3 (「事前・事後学習課題をしましたか」)、A4 (「到達目標を達成できましたか」)、A5 (「授業はシラバス等の内容に沿って行われましたか」) がともに大きな統計量を示し、強い有意性が認められる。2011 年度より 2012 年度になって評価が高まったことが言える。A2 (「授業に意欲的に取り組みましたか」) と A6 (「教員から授業に対する熱意を感じましたか」) には弱い有意差が認められ、A2 は評価値が上昇した一方で、A6 については評価値が下降している。

法学部では、A3 にかかなり強い有意差が認められ、2012 年度になって評価が高まったと言える。また A2、A4 には弱い有意差が認められ、ともに評価値が上昇している。

また、経営学部、法学部ともに A3 にかかなり強い有意差、A2、A4 にも有意差が認められ、A6、A7 (「授業内容を理解させるための工夫をしていましたか」) はともに負の統計量 (A6 は経営学部だけ弱い有意差あり) を示しているなど、かなり強い有意差が認められるものから負の統計量のものまで、両学部に共通する特徴がみられる。

表 4-1 経営学部における後期授業アンケート結果の変化

	12 平均	12-11 変動差	12-11 差 統計量	11 平均	11-10 変動差	11-10 差 統計量	10 平均
A1	4.269	-0.0055	-0.3678	4.275	0.0207	1.3027	4.254
A2	4.019	0.0474	2.8845	3.971	-0.0097	-0.5466	3.981
A3	3.194	0.1919	8.2116	3.002	-0.0631	-2.5046	3.065
A4	3.759	0.0948	5.5066	3.665	-0.0662	-3.5772	3.731
A5	4.058	0.1065	6.7141	3.952	-0.0129	-0.7554	3.965
A6	4.069	-0.0480	-2.8966	4.117	0.0549	3.0811	4.062
A7	3.997	-0.0007	-0.0368	3.997	0.0445	2.2961	3.953
A8	3.974	0.0307	1.6263	3.943	0.0497	2.4188	3.893
A9	4.056	0.0199	1.1276	4.036	0.0559	2.7847	3.980

表 4-2 法学部における後期授業アンケート結果の変化

	12 平均	12-11 変動差	12-11 差 統計量	11 平均	11-10 変動差	11-10 差 統計量	10 平均
A1	4.194	0.0026	0.1351	4.191	0.0687	3.1161	4.122
A2	3.889	0.0409	2.1426	3.848	0.0765	3.3984	3.772
A3	3.077	0.2123	8.2089	2.864	-0.0803	-2.7234	2.945
A4	3.667	0.0604	3.1331	3.606	0.0245	1.0956	3.582
A5	3.934	0.0009	0.0508	3.933	0.1319	6.1487	3.801
A6	4.054	-0.0184	-0.9840	4.072	0.1820	8.3839	3.890
A7	3.986	-0.0172	-0.8763	4.003	0.1882	7.9240	3.815
A8	3.972	0.0043	0.2100	3.968	0.1915	7.7850	3.777
A9	3.997	-0.0043	-0.2126	4.001	0.2059	8.4366	3.795

参考までに、経営学部・法学部・看護学部以外の学部・学科における後期授業アンケート結果の 2011 年度 - 2012 年度間の変化をみてみよう。表 4-3 は変動差の統計量をまとめたものである。

絶対値が 5 以上の強い有意差が認められたのは、住環境デザイン学科における A6、薬学部における A3 に限られる。しかし経営・法の両学部と比較すると、A6 については正負が反転、A3 については有意性の強さが異なっている。全学部・学科を通してても、経営学部、法学部と類似する変化を示す学部・学科は見当たらない。

しかし、項目ごとに各学部・学科の変化をみると、それぞれ学部・学科によって独自の変化を示しているようにも見える。経営学部や法学部において認められる有意差と同程度の有意差を示す項目や、両学部における上昇的・下降的变化と同方向の変化を示す項目がみられる学部・学科も、それぞれ存在している。記名式授業アンケートを実施している両学部がとりたてて特異な変化を示していると断定することは、ここからだけでは困難だ。

表 4-3 経営・法・看護学部以外の学部・学科における 2012-2011 年度間(後期間)の変動差(統計量)

	C科	A科	E科	M科	B科	V科	R科	L部	Y部	W部
A1	1.3342	-0.3065	-0.3322	0.1977	0.2173	-2.5724	3.5037	1.3360	4.7510	-2.9249
A2	-0.8552	0.6582	0.7864	1.7828	-0.2183	1.1319	3.1268	-2.1616	2.3220	1.7643
A3	0.8369	1.9184	0.7871	4.2428	1.6713	0.9262	1.7942	-0.0464	5.1920	2.2843
A4	2.3332	2.3536	1.5256	3.8308	0.6628	-0.0123	4.2018	-0.3641	1.4722	3.2662
A5	3.4139	0.2373	2.1144	3.8245	-0.7198	-2.4626	4.6263	-0.2478	2.4811	3.9649
A6	4.7387	1.0063	3.1190	1.6221	0.7224	-0.9754	5.3172	-0.9900	2.4755	2.4729
A7	3.4305	1.2684	1.5999	3.4901	0.5964	0.9565	4.9755	-1.4016	1.3039	3.4217
A8	3.7603	0.6576	2.2807	3.3765	-0.3865	1.8005	4.7410	-0.7872	1.2397	3.1995
A9	4.2733	0.9878	2.5445	3.5924	-0.7314	-0.4875	3.3752	-0.8697	0.9430	3.9877

次に、上にみた 2011 年度後期と 2012 年度後期の間の変化を、2010 年度後期と 2011 年度後期の間の変化(11-10 差統計量)と見比べてみよう。

そうすると、経営・法の両学部とも統計量が逆転しているという特徴を見出せる。もう少し詳しく言うと、2010 年度 - 2011 年度に正だった統計量、つまり評価値の上昇的变化が、2011 年度 - 2012 年度では負、つまり評価値の下降的变化に、反対に負であった統計量が正に、またそれほどではないにしても大きかった統計量が小さくなるなどの変化が、全体的にみられるのである。

具体的にみていこう。経営学部では、2010 年度 - 2011 年度に負の統計量を示していた A2、A3、A4、A5(このうち A3 と A4 には弱い有意差あり)は、いずれも 2011 年度 - 2012 年度に正の強い有意差(A2 のみ弱い有意差)が認められる統計量を示している。反対に、2010 年度 - 2011 年度に正の弱い有意差が認められていた A6、A7 は、2011 年度 - 2012 年度には負の弱い有意差が認められる統計量(A7 は有意差なし)を示すようになった。このような正負の逆転は、変化の揺り戻しを意味する。つまり、記名式アンケートの導入により 2010 年度 - 2011 年度に大きく変化を見せた項目について、その評価の若干の揺り戻しが 2011 年度 - 2012 年度に現象化したと考えられる。

同じ見方で法学部に目を向けると、2010 年度 - 2011 年度に負の弱い有意差を示していた A3 が、2011 年度 - 2012 年度に正のかなり強い有意差が認められる統計量を示すようになってきている。反対に、2010 年度 - 2011 年度に正のかなり強い有意差が認められていた A6、A7、A9(「この授業を受講してよかったですか」)は、2011 年度 - 2012 年度には負の統計量を示すようになった。ここにもやはり、2010 年度 - 2011 年度の若干の揺り戻しが 2011 年度 - 2012 年度になって現れている。さらに、正負の逆転はみられないが、2010 年度 - 2011 年度に正の強い有意差が認められていた A5、A8(「教員の話し方は、明瞭でわかりやすかったですか」)は、2011 年度 - 2012 年度では有意差がみられなくなった。これらは評価値の高止まりの状態を示すものと言えよう。

(2) 3 期にわたる記名式授業アンケートの結果の比較

記名式授業アンケートは 2011 年度後期から導入されているが、比較のために、導入前の 2011 年度前期の結果も併せ、表 4-4 に経営学部、表 4-5 に法学部の結果をそれぞれまとめた。これらの表で注目したいのは、両学部において記名式授業アンケートの導入を境にした 2011 年度前期と後期の間の変化と、記名式アンケートを継続実施中の 2012 年度前期と後期の間の変化である。

表 4-4 経営学部における記名式授業アンケート結果の変化

	12 後 平均	12 後-12 前 変動差	12 後-12 前 差統計量	12 前 平均	12 前-11 後 変動差	12 前-11 後 差統計量	11 後 平均	11 後-11 前 変動差	11 後-11 前 差統計量	11 前 平均
A1	4.269	-0.0499	-3.6387	4.319	0.0444	3.1372	4.275	-0.0508	-3.3854	4.326
A2	4.019	0.0530	3.5015	3.966	-0.0056	-0.3561	3.971	0.0985	5.8293	3.873
A3	3.194	0.1087	5.0951	3.085	0.0832	3.8042	3.002	-0.0585	-2.5237	3.060
A4	3.759	0.1338	8.4664	3.626	-0.0390	-2.4214	3.665	0.1124	6.4168	3.552
A5	4.058	0.1922	13.0942	3.866	-0.0857	-5.7674	3.952	0.1480	9.2597	3.804
A6	4.069	0.0981	6.1921	3.971	-0.1461	-9.2587	4.117	0.1927	11.4486	3.924
A7	3.997	0.1436	8.5401	3.853	-0.1442	-8.4827	3.997	0.2061	11.3498	3.791
A8	3.974	0.1788	10.1377	3.795	-0.1481	-8.1860	3.943	0.2099	10.8514	3.733
A9	4.056	0.1464	8.7929	3.910	-0.1265	-7.4960	4.04	0.2446	13.3323	3.792

表 4-5 法学部における記名式授業アンケート結果の変化

	12 後 平均	12 後-12 前 変動差	12 後-12 前 差統計量	12 前 平均	12 前-11 後 変動差	12 前-11 後 差統計量	11 後 平均	11 後-11 前 変動差	11 後-11 前 差統計量	11 前 平均
A1	4.194	-0.0564	-3.2625	4.250	0.0590	3.1909	4.191	-0.1032	-5.4094	4.294
A2	3.889	0.0205	1.1713	3.869	0.0204	1.1126	3.848	0.0542	2.7343	3.794
A3	3.077	0.1728	7.3662	2.904	0.0394	1.5959	2.864	0.0570	2.1859	2.807
A4	3.667	0.1403	7.9914	3.526	-0.0800	-4.3409	3.606	0.1497	7.5183	3.457
A5	3.934	0.1029	6.2123	3.831	-0.1019	-5.8967	3.933	0.1949	10.2175	3.738
A6	4.054	0.0276	1.5969	4.026	-0.0460	-2.5522	4.072	0.2262	11.0905	3.846
A7	3.986	0.0575	3.1973	3.929	-0.0747	-3.9696	4.003	0.2717	12.7480	3.732
A8	3.972	0.0844	4.4982	3.888	-0.0802	-4.0316	3.968	0.2696	12.0316	3.699
A9	3.997	0.0597	3.2402	3.937	-0.0640	-3.3047	4.001	0.2433	11.1253	3.758

まず、2011 年度前期と後期の間の変化（11 後-11 前差統計量）をみておこう。

記名式授業アンケートが導入された 2011 年度後期の、導入前である前期の評価値との変動差は、いずれも有意であることが統計量から明らかであり、特に「教員に対する評価」（A5～A8）と総合満足度（A9）の統計量がかなり強い有意差を示していることから、「2 学部における総合満足度は共に上昇し、評定値 4 に達したことが偶然ではないことを示唆する。・・・今回の結果は記名による効果に加わり、さらに評価値が高くなったと思われる」（『FD News』No. 33、p. 12）との結論が導かれてきたところだ。

たしかにこのような「記名効果」が指摘される一方で、「すべての年度で前期の総合満足度が後期の総合満足度を下回って」（『FD News』No. 34、p. 5）いることが明らかにされてきた。したがって、全学的にみられる前期と後期の変動差（項目によっては上昇・下降が異なるだろう）に、2011 年度、2012 年度の経営学部、法学部における変化が解消されてしまうかどうか、他学部の結果を参照しながら、確認しておく必要がある。

表 4-6 は、経営学部、法学部、看護学部以外の学部・学科における 2012 年度の前期と後期の間、また 2011 年度前期と後期の間の変化を、変動差の統計量で示したものである。紙幅の都合で一部の項目に絞っている。

具体的にみていくと、A1 については、経営学部、法学部はともに下降的に変化し、その有意性は「弱い～強い」という程度である。他の学部・学科で下降的に変化して同程度の有意差が認められるのは、10 学部・学科中 4 つである。A4 についても同様にみると、4 学部・学科が両学部と同様に変化している。A7 と A9 については、両学部における変化にはかなり強い有意差が認められる。他学部・学科の中では、いずれも薬学部のみが相当する。

以上から、2011 年度後期の導入時点での「記名効果」はたしかに、学生の自己評価における変化というより、教員評価における変化に影響したとすることができる。

表4-6 経営・法・看護学部以外の学部・学科における2012年度前-後期間、2011年度前-後期間の変動差(統計量)(一部の項目のみ)

	12 後-12 前差統計量				11 後-11 前差統計量			
	A1	A4	A7	A9	A1	A4	A7	A9
C科	0.9774	-1.2330	-2.2134	-1.8280	5.0916	6.5597	4.5106	4.1444
A科	-2.2741	-3.3101	-3.0407	-2.8856	-3.3697	-1.6681	-1.3023	-1.6851
E科	-2.0391	0.6635	-1.3960	-0.8900	-3.5806	1.1713	-0.9494	-1.9069
M科	-0.5115	3.0332	1.2241	1.3582	0.8929	-3.8328	-3.2303	-4.0812
B科	-2.6412	4.6777	2.2321	2.6716	-0.6153	-0.7503	-1.3898	0.9921
V科	-1.3939	1.6071	3.0792	1.5954	0.2867	5.4736	2.4053	1.6341
R科	0.0458	5.1334	6.5707	4.4887	-0.1506	1.0400	2.6841	2.4486
L部	-0.0874	6.6539	5.4702	4.5652	-6.1055	7.7513	5.2673	4.3688
Y部	0.0524	3.3419	5.3612	6.4409	-1.6505	7.5577	9.0551	8.3697
W部	-0.0808	2.8303	2.1611	2.6179	-4.9722	1.6453	1.7893	1.6671

続いて、2012年度前期と後期の間の変化(12後-12前差統計量)をみよう。

ここでも具体的にみていく。A1については、経営学部、法学部はともに下降的に変化し、弱い有意性が認められる。これと同程度に有意な下降的变化を示したのは、3学部・学科である。A4については、両学部はかなり強く有意である変化をしており、他学部・学科でこれと同様の変化を示しているところはないが、3学部・学科において強い有意差が認められる。A7については、経営学部と法学部とで変化の有意性が異なる。経営学部においてはかなり強い有意差が認められ、これと同等の変化を示した学部・学科は他にない。他方、法学部においては弱い有意差が認められ、他学部・学科の中で上昇的に変化し、同程度かそれ以上に強い有意性が認められるところは6つある。A9についても経営学部にかなり強い有意差、法学部に弱い有意差が認められ、かなり強く有意な変化を示した学部・学科は他にないが、法学部と同程度かそれ以上に強い有意差が認められる学部・学科は5つであった。

以上から、2012年度前期と後期の間の変化をみると、経営学部、法学部における変化には、他学部・学科における変化と比較してみても、2011年度ほど顕著なところがなくなっているように感じられる。「記名効果」は、2011年度後期の記名式アンケート導入時よりも薄らいできたように思われる。

本節での分析を小括する。まず、同じ後期開講科目における評価値の変動を比較し、経営学部と法学部において記名式授業アンケートを導入する前後と、記名式アンケートを継続実施している時点とで、「記名効果」の発現とその「揺り戻し」とでも呼べそうな変化がみられたことを指摘した。ただし、ここで「揺り戻し」といってもそれは相対的なものに過ぎず、厳密なものではない。続いて、両学部が記名式アンケートを導入した2011年度の前期と後期、そして継続実施中の2012年度前期と後期の2点の評価値の変動を、一般的に表れる前期-後期間の変動も考慮に入れながら検討した。その結果、2011年には「記名効果」が、とりわけ教員評価の面で高くこれを評価するように作用したことを指摘した。しかし2012年には「記名効果」は顕著ではなくなった可能性を指摘した。

2012年度後期の授業アンケート分析報告に次のようなコメントがある。「無記名式から移行して変化があったと言える・・・いくつかの質問項目では大きな上昇的变化がみられたが、これは記名式アンケートを継続するうちに落ち着いていくだろうと予想される」(『FD News』No. 33、p. 15)。この「落ち着く」というのは、記名式導入前の評価値の水準に戻るということを必ずしも意味しない。上昇(下降)し過ぎた評価値はまた下降(上昇)するだろうが、そうならないものもある。表4-1や表4-2をみれば「高止まり」と解

積できるようなものもあり、実際に評価値をみると高くなった水準を維持しているような項目もある。つまり、「落ち着く」というのは「揺り戻し」ばかりではなく、「高止まり」もまた一つの「落ち着いた」形であると言えよう。

このように「記名効果」には、評価値を過分に上昇・下降させるように作用するのみならず、上昇した評価値を適正な範囲内で上昇・下降させながら維持するような作用もあり、前者の「記名効果」はむしろ創発時の一過性の効果とみるのが妥当だろう。

では、このような「記名効果」をもつ記名式授業アンケートと今後、どのように付き合っていくべきか。「記名効果」に評価値の維持作用がある以上、結果を無記名式アンケートのそれと比較することには、それほど大きな意味はなくなる。記名式アンケートでは、比較から学ぶことも可能だが、歴史、過去からの変化に学ぶことの方が効果的だろう。記名式であるだけに、何がどう変化したのかを把握する有効なツールになり得るからである。

V まとめと課題

以下では今期実施された「学生による授業アンケート」の集計・分析結果から明らかになった点をまとめ、今後の課題について検討する。

(1) 単純集計結果について

今期は去年の後期と比較して若干ではあるが数値の向上がみられた項目もあった。

①「学生の授業への出席」については、前期と同様の結果ではあるが、出席率は極めてよいという結果になっている。ここ数年同様の傾向が続いているが、Ⅱ節でも述べられているように、アンケートの実施時期との関連性も考慮すべきであろう。

②「授業の事前・事後学習の遂行」については、今年度の前期、去年度の後期と比較して改善がみられた。授業の事前・事後学習の必要性について認識がなされるようになり、授業においてもこの点が考慮されるようになってきたものと思われる。

③「シラバスに沿った授業の進行」は、若干ではあるが数値が上昇している。逆に「どちらともいえない」が去年の後期(29.8%)よりもやや減少している(28.3%)。『FD News』No. 33で指摘されたように、シラバスをそもそも分かっていない学生が減少してきたことは望ましい傾向である。

④「教員の熱意」、「内容を理解させる工夫」、「教員の話し方」は微増している。誤差の範囲内とも言えるが、平均値が4を越える学部・学科もいくつかある点は評価すべき点であろう。

(2) 授業の客観的諸条件の分析結果について

①「総合満足度」に焦点を当てた諸条件の分析については、Ⅲ節のグラフから見て取れるように、多少のぶれはあるものの、小規模の授業で満足度が高いという傾向はこれまでと同様である。

②各項目間の相関についてもこれまでと同様の傾向を示している。すなわち、満足度と「教員の熱意」、「理解させる工夫」および「教員の話し方」の間にかなり高い相関があること、さらに、「質問6」、「質問7」および「質問8」相互の相関係数の値が高い点である。

(3) 記名式アンケートの実施結果について

Ⅳ節での小括において述べられているように、記名式を継続している法学部、経営学部においては、「記名効果」の維持と「揺り戻し」ないしは「高止まり」と言うべき現象がみられる。つまり、記名式の導入時はこれを導入する前と顕著な違いが見られたが、その後一定水準に落ち着いてきたということである。

経営学部で学生に対して行ったアンケートでも同じような傾向が見られる(詳細は本FD Newsの経営学部の報告を参照していただきたい)。すなわち、「無記名」から「記名

式」に変更されてもアンケートに対して取り組む姿勢が「変化しなかった」と答えた学生が76%に上っており、授業評価に対しても「変化していない」との回答が84%ある。一見すると「記名効果」によって評価が変化したことと矛盾するようにも見えるが、記名式に関するアンケートを実施したのが本年度10月であり、それまでに記名式の授業アンケートが2回実施されていることを勘案すれば、先に述べた「揺り戻し」ないしは「高止まり」の現象と大体符合すると思われる。平たく言うならば「記名式」のアンケートにも学生が慣れてきたということであろう。

試行的に実施された記名式アンケートを今後も続けるかどうかについては、両学部で検討いただく他はないが、再びIV節での小括を引くならば、記名式で実施されたアンケートの結果を授業改善に役立てるために、学部間での水平的なデータの比較よりも、過去のデータとの垂直的な比較を行う方がより有用であるということだけは言えるであろう。

(4) 今後の課題

現行のアンケートについては、今回は若干数値の向上が見られるものの、ここ数年数値の上での変化はなくなってきているということがしばしばFD Newsの中でも指摘されてきた。その中で法学部、経営学部で「記名式」アンケートの導入が試みられているが、これも数値の点ではある予想された範囲の中に収まると思われる。

そこにはある種のマンネリ化の進行が見られるのだが、それを打ち破ろうとする動きも出てきている。自由記述欄に書かれた学生からの意見を抽出し、これに対する教員の対応、コメントを集約して教員間で情報の共有化を図るという作業が各学部・学科で進められてきている。

アンケートの数値にも一定の意味はある。しかし、数字だけでは授業の課題が明確にはなりにくい。その点で授業改善をする具体的なきっかけとなるのは、個々の学生の具体的な意見・感想であることは言うまでもないであろう。授業アンケートが「役に立っていない」と答える学生が多い現状において、アンケートを授業改善に役立つものとするためには、アンケートの実質化を図り、学生のいちいちの声に対して教員が責任をもって答える体制を構築する必要があると思われる。上に述べた教員のコメント集はそのための第一歩とみなすことができよう。これを学生の耳にまで届くような仕組みを作ることが次の課題となる。その際、現在のWebでの公開がこの課題に対して十分に応えているかどうかを検討する必要がある。また、さらに遡って、現行のアンケートの質問項目、実施方式がこれに相応しいものであるかどうかを検討しなければならない。

本年度のFD委員会では、アンケートの問題点を洗い出し、改訂する作業も並行して進められてきた。改訂作業の柱は、質問項目の実質化と項目数のスリム化、そして記述欄の充実である。ただ、その中で浮かび上がってきた問題もある。各学部・学科によって授業の形態、教育目標、学生の授業態度などの点でかなりの違いがあり、それに対応する仕方が必要となってくるアンケートの対象科目、実施形態、さらには質問項目そのものも違ってくるということである。各学部のニーズを踏まえながら、大学として共通の教育理念に基づいた授業アンケートを実施することが求められる。

アンケートの改訂作業は今後も続けられであろうし、学生へのフィードバック体制の確立にもまだ時間が必要であろう。その意味で今年11年目を迎えたFD活動には、まだまだ解決しなければならない課題があると言える。

「スポーツ実習」のアンケート実施結果の報告

スポーツ振興センター 横山喬之

スポーツ振興センターでは、「スポーツ科学実習Ⅰ・Ⅱ」「スポーツ科学」「生涯スポーツ実習」の授業改善を目的として、2012年度後期に授業アンケートを行いました。

【方 法】

対 象：スポーツ科学実習Ⅰ・Ⅱ、スポーツ科学、生涯スポーツ実習を履修し、アンケート実施日に出席した学生。

実施期間：2012年12月17日(月)、2013年1月9日(水)～15日(火)

方 法：【結果】に記すアンケート項目に対して、マークシートを用い5段階尺度(1：まったくそう思わない～ 5：強くそう思う)によって回答させた。回答は無記名で行い、成績評価には一切関係しないことを文書と口頭にて説明した。

【結 果】

アンケートの回収数は1,150であった。

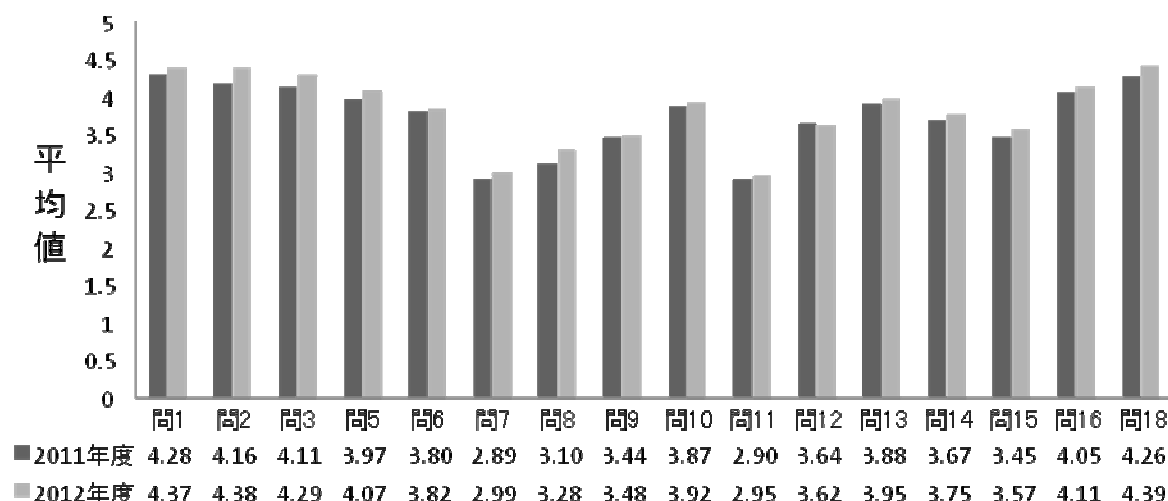
① 質問項目1～18の平均値、標準偏差、18.総合満足度とのPearsonの相関係数(r)を表に示す。

質問項目	平均値	標準偏差	18との 相関
1. この授業に意欲的に取り組んでいますか。	4.37	0.99	0.58
2. この授業は楽しいですか。	4.38	0.98	0.66
3. この授業は好きですか。	4.29	1.03	0.65
4. 運動強度はどうか(1：楽である～5：きつい)。	2.66	1.31	0.06
5. この授業で、学生同士のコミュニケーションはとれていますか。	4.07	1.03	0.52
6. 授業の用具は充実していますか。	3.82	1.10	0.41
7. 授業の中で、その種目の理論・ルールについて講義があるといいと思いますか。	2.99	1.33	0.12
8. この授業を受けて、体力がついていると思いますか。	3.28	1.24	0.32
9. この授業を受けて、技術が身についていますか。	3.48	1.16	0.41
10. この授業を受けて、心の健康に良いと思いますか。	3.92	1.04	0.54
11. レクリエーション型の授業(例：ハイキング・ウォーキングなど)があれば、受講したいですか。	2.95	1.39	0.13
12. 今後、自分自身で何かのスポーツ活動を始めたり続けようと思いますか。	3.62	1.19	0.40
13. この授業履修の目標として「単位修得」に重きを置いていますか。	3.95	1.11	0.35
14. この授業履修の目標として「体力維持・増進」に重きを置いていますか。	3.75	1.12	0.51
15. この授業履修の目標として「技術の習得」に重きを置いていますか。	3.57	1.16	0.46
16. 大学の授業で、スポーツ実習、スポーツ科学は必要だと思いますか。	4.11	1.05	0.70
17. 2、3、4年次においてもスポーツ実習(実技)があれば受講したいですか。	4.08	1.13	0.68
18. 総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか。	4.39	0.91	/

昨年度のアンケート内容との相違点は、以下の通りである。

- 1) 問 4 における運動強度の回答数値を逆転させたこと
 - 2) 「集中授業」に関する項目を削除したこと
 - 3) 問 17 を追加したこと
- ② 下記に示したグラフは、2011 年度と 2012 年度のデータである。

2011年度と2012年度のデータ



【考察】

本アンケート結果を以下の 2 項目に分類し考察した。

(1) 授業改善について

2011 年度と 2012 年度のデータでは、全体的に数値の上昇がみられた。これは保健体育教室教員の授業改善に対する取り組みによる成果であることが示唆される。

(2) 受講生の意識について

「1. この授業に意欲的に取り組んでいますか。」「2. この授業は楽しいですか。」「3. この授業は好きですか。」「5. この授業で、学生同士のコミュニケーションはとれていますか。」「16. 大学の授業で、スポーツ実習、スポーツ科学は必要だと思いますか。」「17. 2、3、4 年次においてもスポーツ実習（実技）があれば受講したいですか。」「18. 総合的に考えて、この授業を受講してよかったと思いますか。」において平均値 4.00 以上の数値を示し、これに加えて問 18（総合的満足度）との相関も高い値を示した。このことから、受講生の意識はスポーツが好きだから受講していることが示唆される。また「13. この授業履修の目標として「単位修得」に重きを置いていますか。」を見ると平均値がほぼ 4.00 と高い数値である。つまり、好きなことが単位修得につながるということも、受講する要因の一つであることが示唆される。

【まとめ】

スポーツ実習に対する授業アンケートを行った結果、今後の授業改善のためのデータを多く収集することができた。今回得られた知見により、今後も授業改善のための取り組みを続け、よりよい授業を展開できるよう心掛ける次第である。

【今後の課題】

本授業は選択（看護学部を除く）科目であるため、「スポーツ好き」が受講する科目である。そのため、今後も高得点を得られることが予想できる。その中でも、学生の主観的な

項目である「8. この授業を受けて、体力がついていると思いますか。」「9. この授業を受けて、技術が身についていますか。」「10. この授業を受けて、心の健康に良いと思いますか。」に関しては平均値 4.00 を下回っている。これらの項目の数値を上昇させることが、今後の授業改善のための課題であると考える。

理工学部 FD 活動報告

都市環境工学科 片桐 信

理工学部 FD 委員会では、昨年度までの活動を継承しかつ新たな試みを加え、各教員の FD 活動を支援し活性化させるために、以下のような活動を推進してきました。

1. 理工学部 FD ワークショップ

本年度の FD ワークショップは、2012 年 10 月 9 日に 10 号館 6 階語学ゼミ室と 1065 教室を利用し行われました。今回は、特に「アドバンスワークショップ」と位置づけ、これまでの「全般的、研修的なもの」から「特定課題解決を目標としたもの」と、その実施形態を変更して進めました。具体的な課題は、①アクティブラーニングなど新たな教育法の検討（リーダー：M 科池田教授）、②優秀な学生を育てる教育（リーダー：E 科小川教授）および③大学院教育の質的向上と大学院進学率の向上（リーダー：V 科芳本教授）の 3 テーマであります。また、今回は、ワークショップで得られたプロダクトをたたき台として、その後も継続的に各グループで検討・議論を進め、年度末の理工学部 FD フォーラムにおいてその結果をご報告願う方式としました。最終的な結果は FD フォーラムで報告されます。



2. 授業見学

本年度も 6 月と 11 月の 2 度にわたり、各 1 ヶ月間の授業見学を行いました。今回は、授業見学結果集計の簡略化を検討し、これまでの手書きでの見学結果シートから、共通のエクセルシートに教員自ら記入していただく方式を採用しました。非常勤講師の先生方による見学結果に関しては、各学科の FD 委員が手書き資料からエクセルシートに転記する方式としました。これにより、各教員へのフィードバックの速度が上がり、良い効果が得られたものと考えます。

3. 授業アンケート

本年度も前後期各 1 回の授業アンケート結果に対する学生諸君へのフィードバックを強化するために、WEB 公開される教員の意見を迅速かつ確実に集めるべく、教務課から各学科に専用のエクセルファイルをお送りいただき、そこに教員毎に記述する方式を取りました。授業アンケートでは、特に自由記述欄に記されている内容を意識して、前年度とのポイントの変化などを参考に学生へのコメントを記入してもらいました。この回答率が 100% に近づくことを目標にすれば、学生諸君へのフィードバックがより確実なものとなると考えております。尚、経営学部・法学部では記名式のアンケートを模索中です。理工学部内にも記名式に関する様々な意見が御座いますが、理工学部としては当面は無記名で

のアンケートとしたいと考えます。本件については、学部ごとの特色もありますので、理工学部としては、今後他学部の状況等を勘案して検討を進めていくべきと考えます。

4. 理工学部 FD フォーラム

理工学部 FD フォーラムは 3 月 14 日にプチテアトルにおいて開催されました。前述の理工学部 FD ワークショップの継続活動の結果について、各ワーキンググループから報告がなされました。これらの課題は、今回のワークショップやフォーラムだけでは結論に至らない大きなテーマであると考えます。今後も継続的な活動が必要であり、理工学部 FD 委員会としても形式を変化させつつ継続的に取り組むべきと考えられます。

外国語学部 F D 活動報告

外国語学部 藤井香子

外国語学部が 2012 年度に行った主な FD 活動は、次の通りである。

2012 年 7 月 3 日 (火) 16 : 40 ~ 18 : 10

2012 年度第 1 回 FD フォーラム「基礎ゼミナール (1 年次後期) の目標設定にむけて一どのような力を学生につけさせたいと考えるかー」の開催

2012 年 11 月 19 日 (月) ~ 12 月 1 日 (土)

「授業公開・見学」の実施

2013 年 2 月 5 日 (火) ~ 2 月 18 日 (月)

「学生による授業アンケート」(後期) 自由記述欄の取りまとめと結果の報告

2013 年 3 月 14 日 (木) 16 : 20 ~ 17 : 50

2012 年度第 2 回 FD フォーラム「1、2 年次ゼミナールでの「就職に対する動機付け」について—2012 年度実施の SPI 対策の総括と今後に向けて—」の開催

以上のうち、「第 1 回 FD フォーラム」の詳細については、すでに『FD NEWS』No. 33 に述べさせて頂いた。前期の「学生による授業アンケート自由記述欄の取りまとめと結果の報告」は、諸事情により今年度は実施出来なかった。

昨年度実施した「FD 活動アンケート」の結果に基づき、昨年度後期に実施した時と同様に、外国語学部では後期の「授業公開・見学」の実施に際して希望者を募り、計 11 科目の公開・見学を実施した。なお、授業の見学報告については FD 委員会としては直接的には関与せず、公開者と見学者双方がそれぞれ個別に行ってもらったようにした。

後期に実施の「学生による授業アンケート」の自由記述欄の取りまとめと結果の報告については、授業運営に関して、実用性のある外国語教育や授業中のパソコン操作についての意見が若干あった。また、バスの増便やコンビニ店の増設の希望といった、大学生活全般に関する意見も若干出された。

最後に、3 月 14 日 (木) に第 2 回 FD フォーラムを実施した。外国語学部では今年度、1、2 年次ゼミナールで SPI 対策用のドリルを全学生に配布し、毎回の授業最初の 15 分ほどを利用して学生にドリルを取り組ませ、学期末にテストを行うということを実施したが、後期のテストは実施されずに終わってしまった。そこで、外国語学部として SPI 対策を今後どの様に進めるのか、1、2 年次生を対象として「就職に対する動機付け」をどの様に行うのが良いのかということについて、就職委員会からのアンケート調査の結果報告や国際文化コースで実施の SPI 対策授業の内容の報告と合わせて検討した。

経営学部 FD 活動報告

経営学部 黒澤敏朗

1. 「授業アンケート」についての調査

経営学部では 2011 年後期から、「授業アンケート」では学生の学籍番号、氏名を記入する「記名式」アンケートを試行している。「記名式」アンケートは、学生の責任ある回答を得て、教員も責任を持って授業改善を行うために実施するものであるが、今後もこの方法を継続するかどうかなど、アンケートのあり方を検討する際の参考にするため、10 月に「記名式授業アンケート」についてアンケートを実施した。対象は、無記名式から記名式に変わった体験を持つ、学部 2、3 年生で、対象者 559 人のうち、427 人から回答を得た（回収率 76%）。誌面の都合で一部省略するが、その結果のあらまきは以下の通りである。

質問 1. 「無記名」から「記名式」に変更されて、あなたのアンケートに対する取り組み姿勢が変化しましたか。

(24%) これまでより責任を持って書こうと思った。

(76%) 変化していない。

質問 2. 「無記名」から「記名式」に変更されて、あなたのアンケートでの授業評価は変化しましたか。

(14%) これまでより、高い評価をつけた。

(2%) これまでより、低い評価をつけた。

(84%) 変化していない。

質問 3. 「無記名」から「記名式」に変更されて、あなたのアンケート用紙の「自由記述欄」への記入内容などが変化しましたか。

(4%) 積極的に書くようになった。

(14%) あたりさわりのない意見だけ書くようになった。

(6%) これまで書いていたが書かなくなった。

(32%) 変化なく、これまでと同じように書いている。

(43%) ほとんど書いたことがない。

質問 4. 「記名式」「無記名式」を問わず、授業アンケートの効果について、あなたはどのような意見や感想を持っていますか。

以上より、記名式にすることによって対応が制約されている（書きにくくなった）と考える学生は少数であることがわかったので、学部 FD 委員会としては記名式のアンケートを今後も継続することにした。それよりも、質問 4 で授業アンケートが「授業改善に役に立っている」と答えた学生が 22%に過ぎないことは、教員側の FD に対する姿勢を問われていると考えて差し支えなく、形式ではなく、「結果をいかに活用するか」が今後の最重要課題であることが示されたと言えよう。

2. 「基礎ゼミ」についての調査

経営学部では 1 年次前期に「基礎演習」、後期に「専門基礎演習」を開講しているが、これまで通常の「授業アンケート」の実施対象にはされてこなかった。しかし、後期科目に関しては以前から多くの課題があることが指摘されていることもあり、今後の科目のあり方の参考にするため、12 月に両科目についてのアンケートを実施した。対象は、科目を履修済みの学部 2~4 年生で、対象者 829 人のうち、522 人から回答を得た（回収率 63%）。

誌面の都合で一部省略するが、その結果のあらまは以下の通りである。

質問 1. 「基礎演習」および「専門基礎演習」について、シラバスに記した演習の目的等を、

- (42%) 知っていた
- (58%) 知らなかった

質問 2. 「基礎演習（前期）」を受講して、演習の目的等は達成したと思いますか。

- (25%) 達成した（役に立った）。
- (43%) ほぼ達成した（ほぼ役に立った）。
- (15%) あまり達成できなかった（あまり役に立たなかった）。
- (3%) 達成しなかった（役に立たなかった）。
- (13%) わからない。

質問 3. 「専門基礎演習（後期）」については、質問 2 とほぼ同じ回答結果なので省略

質問 4. 「基礎演習」および「専門基礎演習」を受講して、演習の目的以外に得られたことがありますか。（複数回答可）。

- (24%) 議論や討論の方法が身についた。
- (45%) 高校で学ばなかった新たな知識を得た。
- (35%) 先生に親近感をもった。
- (37%) 友達ができた。
- (04%) 大学が好きになった。
- (28%) 2 年次以降の専門ゼミの選択において参考になった。
- (21%) 図書館をより利用するようになった（利用の仕方がわかった）。

質問 5. 「基礎演習」および「専門基礎演習」を受講して、問題と感じた点はどのようなものですか。（複数回答可）。

- (8%) 内容が上記目的と一致していない。
- (24%) 教材、教科書の内容に興味がなかった。
- (14%) 討論や議論が行われなかった。
- (11%) 必修である。
- (31%) 先生や好きなテーマを選択できない。

3. 経営学部 F D フォーラムの実施

2 月 18 日（月）13 時から 15 時まで、11 号館スカイラウンジで教員 17 名が参加した。最初に、前項の「基礎ゼミ」に関するアンケート結果についての報告があり、次に後期の「専門基礎演習」の内容を教員各自が簡単に説明し、最後に自由討論という順で行われた。誌面の都合で内容は省略するが、後期科目は教育目標の設定に問題のあることが議論された。

薬学部 F D 活動報告

薬学部 藤森 廣幸

薬学部では、本年度4回の学部FD委員会を開催した。その都度議事録を作成し、教授会に報告した。ここでは、1) 第1回薬学部FDフォーラム（全体会議）、2) 授業公開について、3) 第1回薬学部FD-ワークショップ(FD-WS)、および4) 第2回薬学部FD-フォーラムについて概略を紹介する。

1) 第1回薬学部FDフォーラムについて

本FDフォーラム（全体会議）は4月4日（水）10時から開催された。内容は、1)看護学部開設による組織・業務等について、2)新採用者の紹介（7名）、3)「早期体験学習」および「スタートアップゼミ」の協力依頼について、4)実務実習について、5)カリキュラム改正に伴う教務事項について、6)その他についてであった。薬学部では、1年次生には、「薬剤師になるために」の早期体験学習とスタートアップゼミ、4年次生には、共用試験「CBT、OBCE（客観的臨床能力試験）」対策と実施、5年次生には、長期実務実習（病院・調剤薬局）、6年次生には、卒業試験と薬剤師国家試験が控えている。これらの実習・演習等を円滑に遂行するためには、薬学部の全教職員の協力が必要となる。従って、このフォーラムでは薬学部長、教務委員長、実務実習委員長、事務室長を含む各担当教職員が、概略説明・質疑応答し、新任を含む全教職員の研修を行った。

2) 授業公開について

授業公開は、6月4日（月）から6月15日（金）の2週間、実習・演習科目を除く全講義を対象に実施した。委員長が講義を見学した教員から電子メール添付で提出された感想記入用紙（無記名）を取りまとめて、当該講義担当者のみにも通知した。前期専門科目41のうち25科目に対して、延べ39件、18名の教員に感想文が寄せられ、合計176のコメントが記されていた。その内容は、教員の技量[話し方、話の内容、講義のペース、声（聞き取り易さ・大きさ・速さ）、重要箇所の明示など]、講義の方法（板書、教科書、プリント、パワーポイント、語りかけなど）、学生の受講態度（出席率、居眠り、私語、その他）、担当教員へのアドバイスなどに分類できた。感想文には、ポジティブ評価が多く、概ねPNP形式の感想が目立った。学生の受講態度については、教科により評価が分かれたことから、講義の方法（小テスト・座席指定・参加型講義など）や担当教員の指導力（問いかけ・注意など）によって差が出たと考えられる。

3) 第1回薬学部FD-WSについて

学部FD委員会は学部教務委員会の多々ある問題の一つとして、課題-1)留年生を減らすための対応、課題-2)講義への出席率が低いことへの対応について、原則講師以上の全教員および参加希望の助手・助教・事務職員を対象としたWSを立案した。WSは、7月7日（土）、14時から18時まで行った。参加者は、教員（教授13名、准教授7名、講師10名、助手・助教10名）、および事務系職員4名であった。方法はワールド・カフェ方式（WSなどで修得された”KJ法”に類似した方式）による討論と発表。その概略は、第1ラウンド「学生の現状を語ろう」を5名/1グループ、8グループで30分間、第2ラウンド「摂南大学薬学部の教育に不足しているもの」を異なるメンバーで、30分間討論した。参加者は討論内容の要点を適宜模造紙に筆記した。第3ラウンドは上述した課題-1および課題-2に対する「問題点改善のための提言」について各々4グループで、70分間討論した。この間に、発表用のパワーポイント資料を作成した。最後に、1グループ3分間の口頭発表および質疑応答を含め全体で約40分間の意見交換を行った。4時間にわたる長時間にも関わらず、参加者は非常に真剣に意見交換されていたのは印象的であった。

4) 第2回薬学部FDフォーラムについて

委員会では、上述した学部FD-WSで口頭発表された資料および第1および第2ラウンドで模造紙に書き込まれた内容を集計し、分類分けの作業を行った。得られた要点を全教職員に対して、第2回FDフォーラム（9月6日（木）15時から）にて報告した。分析した結果、口頭発表では、合計75件の意見が提示され、そのうち16件は現状分析（問題提起を含む）、残り59件は方策に関するものであった。現状分析について、学部教員は学習意欲や能力など学生の資質が出席率や留年生の諸問題と関係あると考え、特に低学年次生の行動に注目

していることが分かった。これを反映して、教育プログラムの改善など、低学年次生から学習意欲を向上させるための方策が提案された。その他、出席管理、講義改善、試験、個別指導などに関する課題解決法が提案された。具体的なアイデアとして期末試験等の評価基準の見直し、スタートアップゼミの充実、教員や御父母への出席データの配送、チューター制度（ティーチング・アシスタント）の導入などが示された。また、学生の現状や問題点に関する情報の共有化や、教員同士の連帯強化に関する提案など、問題解決につながる重要な少数意見も得られた。これらの分類分けしたデータは全教員にメールにて配信された。

ワールド・カフェ方式によるFD-WSは初の試みであったが、薬学部教職員の約半数が出席し、活発な討論がなされた。指摘された問題点はほぼ共通していたが、それに対する方策は多様であった。今後これらの提案を学部運営に生かしていくことが重要な課題である。FD委員会としては、薬学部の団結力とオープンに議論できる環境こそが諸問題解決の原動力と考え、ワークショップの改善に努めていく方針である。

最後に、学部FD活動に御理解・御協力いただきました、学部長、学科長およびFD委員会のメンバーには感謝いたします。

経済学部 FD 活動報告

経済学部 岸田未来

2012年度の経済学部FD活動は、全学のFD活動と連携しながら、2011年度の学部FD活動の方針を引き継いで、1. 経済学部教員による学部専門科目の相互授業参観、2. 学生FDミーティング、3. 2回のFD会議を実施しました。

1. 経済学部専任教員による学部専門科目の相互授業参観

今年度の相互授業参観は、前期は全学の「学生による授業アンケート」実施期間と並行して、後期は授業期間の終盤に設定して行われました。相互授業参観の目的は、摂南大学経済学部の特徴を把握し、それに対応した授業を実施できるように、参観者・被参観者が互いに工夫している点を学びあい、授業改善のためのアイデアを出し合うことです。今年度は学部開設3年目ということで、新たに開講される科目を中心に参観ができるよう工夫しました。

実施については、昨年度までと同様に、経済学部教員は実施期間中、専門科目への参観を自由に行えることとする、ただし参観者がいない科目が発生しないように、あらかじめ最低限の参観者の割り振りを行う、また参観者には「記入シート」に授業の特徴・工夫点等を書き込んでもらい、授業終了後、参観者・被参観者で授業改善のための議論を行ってもらうこと、としました。今後の課題としては、専門科目の授業参観がほぼ一巡したために、新たな実施方法やポイントを絞った参観などを考えることがあげられています。

2. 学生FDミーティング

今年度は2013年1月15日に、経済学部2年生17名と教員2名とで、学生生活（特に授業）に関するフリーディスカッションを中心としたミーティングを行いました。ミーティングの目的は、学生たちが日ごろの大学生活、特に授業内容についてどのように感じ、受け止めているのかを直に聞き、また学生同士でもお互いに交流してもらうということです。

ディスカッションでは、最初は緊張しているように見えた学生たちも、徐々にさまざまな意見を出すようになり、最後には活発な話し合いとなりました。今年度は、昨年度の学生FDミーティング実施の教訓として、学生たちから出された意見や提案について、教員

側が自らの授業改善のためにそれらを真摯に受け止め、生かすことが何より重要ではないか、という意見が教員からも出されていました。そのために、今年度は後期のFD会議において、学生FDミーティングで出された意見を踏まえて、具体的な授業改善策を考えることが事前に確認されました。

3. FD 会議

今年度も、前期・後期のそれぞれにおいて、授業改善やそれに関わる問題点などを議論するため、経済学部専任教員によるFD会議を実施しました（後期は学内公開）。今年度の会議では、経済学部開設3年目ということで、徐々に成果がでてつつある演習科目の内容に関する議論を中心に行いました。前期では、相互授業参観に関する議論のほかに、3名の教員による演習科目の実施内容に関する報告や、学生指導にかかわる体験交流などを行いました。後期のFD会議では、前期FD会議で取り上げられなかった前期・後期の授業アンケートの自由記述欄に関する議論、および学生FDミーティングの内容報告を踏まえた授業改善に関する議論を中心に行いました。

2013年度は、経済学部として卒業回生までそろそろ初めての年となりますので、これまでのFD活動を踏まえつつ、改めて経済学部の4年間を通じたカリキュラムや授業内容全般を評価することを課題としたいと思います。

看護学部 FD 活動報告

看護学部 眞野祥子

2012年4月に開設した看護学部では、今年度、以下の3つのFD活動を実施した。

- (1) 薬学部—看護学部合同学術交流会
- (2) ティーチング・ポートフォリオについての講演会
- (3) ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

以下に活動の概要を記す。

(1) 薬学部—看護学部合同学術交流会

薬学部、看護学部の垣根を越えた教育・研究での取り組みの推進・強化を目的とし、薬学部の教育推進委員会と共同で8月29日に枚方キャンパス7号館1階ピロティにおいて合同学術交流会を実施した。薬学部から29演題、看護学部からも29演題、合計58演題のポスター発表を行った。本企画に関する参加者からアンケート結果から、「自分と似たテーマがあり参考になった」「研究の発展につながる出会いがあった」等の肯定的な評価がある一方で、「他学部の教員の研究内容は領域の専門性が高く、接点を見出すことはできなかった」「この交流会の評価は、実際にどれだけ学部間での共同研究が実施されたかではかる方が適当だ」といった課題が残った。

(2) ティーチング・ポートフォリオについての講演会

本学部は現在31名の教員で構成されているが、過去に他大学で教員を経験してきた者、初めて教職に就いた者など、バックグラウンドは様々である。本学部の理念として、「生命の尊厳と人権の尊重を基盤とした倫理観、心豊かな人間性と看護実践能力を備えた人材を育成し、地域社会における保健・医療・福祉の向上、看護の発展に貢献できる看護職者を養成すること」を掲げている。そこで、本学部の理念達成にむけて、看護学部全教員が連携を図りながら一丸となって教育研究活動に取り組んでいくべく、ティーチング・ポート

フォリオの導入を試みた。

ティーチング・ポートフォリオとは、自らの教育活動について振り返り、その自らの記述をエビデンスによって裏付けた厳選された記録のことを言う。これを書くことで、普段行っている教育活動を言語化し、理念を導出する過程で自己省察が行われ、自分は教員として何をやってきたのか、教員としてこうありたいという意識付けを行うことができる。各教員の教育活動を活性化し、教員間連携を取りやすくする効果もある。

まず導入として、7月31日、大阪府立大学工業高等専門学校の北野健一先生に来ていただき、ティーチング・ポートフォリオの概要についての講義とミニワークショップを実施した。研修会前までは、「私にポートフォリオが書けるのだろうか」と不安を感じていたが、実際に講演を聞き、実物を見ることもでき、ミニワークショップを体験することで、「まずは自分がこれまでにやってきたことを振り返ってみたら書けるかも」と思えるようになった。また、特にミニワークショップは好評で、「もっと時間がほしかった」「私もティーチング・ポートフォリオを書いてみたいと思った」等の肯定的な意見が多く聞かれた。26名の看護学部の教員が参加した。

最終的な目標として、看護学部でワークショップを開催して多くの教員が自身のティーチング・ポートフォリオを作成できることを目標にしている。そこで、看護学部のFD委員が第8回大阪府立大学工業高等専門学校ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ（2012年、8/8～10開催）に参加し、まずは自身のティーチング・ポートフォリオを作成してきた。このワークショップに参加することで、メンター（ティーチング・ポートフォリオを作成する人（メンティー）をサポートする役割）としての資格を得ることができる。

（3）ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ

2013年3月15～16日に、ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。薬学部の安原智久先生と大阪府立大学工業高等専門学校の北野健一先生、井上千鶴子先生にご協力いただき、看護学部の教員5名がティーチング・ポートフォリオを作成した。メンティーの感想として、「書き上げることができ達成感を感じる」「自分の今後の目標が明確になった」等の意見を得た。今後は、ティーチング・ポートフォリオ作成の効果を評価しつつ、継続してワークショップを開催していきたいと考えている。

他大学授業アンケート実施状況調査

FD委員会 SG3

1. はじめに

今年度のFD委員会が課題としている授業アンケート改訂にかかわる資料として、同委員会SG3では、2012年6月下旬から7月下旬にかけて、他大学における授業アンケートの実施状況について調査を行った。

調査方法は次の通りである。まず、常翔学園の他大学および「関西地区教務事務連絡協議会」「人間ネットワーク」に加盟する大学の教務課に対して、授業アンケートの内容や実施状況についてメールで回答を依頼した（質問項目は次節を参照）。そのさい現行のアンケート用紙についても提供を求めた。その結果、関西を中心とした下記17大学より回答を得ることができた。このうち1校は実習系の学部を設置しているうえ、学部間で異なるアンケートを実施している。そこで本学の薬学部や看護学部の参考にする目的で、この大学の2つの学部をここでは2大学として扱った。

桜美林大学	追手門学院	大正大学
大阪工業大学	京都産業大学	奈良大学
大阪学院大学	甲子園大学	阪南大学

大阪経済大学	神戸学院 (総合リハ)	広島国際大学
大阪商業大学	神戸学院 (栄養)	佛教大学
大阪電気通信大学	淑徳大学	桃山学院大学

以下、質問項目別に回答内容を概観してみる。なお各大学には回答内容は外部に公表しないと約束していることから、以下では具体的な大学名を挙げることを避ける。

2. 各大学への質問項目とそれに対する返答

(1) アンケートの媒体

本学では紙媒体を用いてアンケートを実施しているが、Web を利用して実施している大学もある。「C ラーニング」と呼ばれる製品を利用して携帯電話によるアンケートを実施している大阪工大はその一例である。また、実施時期によって両者を使い分けている大学もある。

OMR (光学式マーク読取装置) : 14 校

Web (PC や携帯電話) : 4 校

今回の調査では「紙」か「Web」の 2 択で回答を依頼したが、それらの運用形態まで考慮すればより多くの方法が考えられる。「Web」なら PC 教室や携帯電話を利用した授業内でのアンケート実施と、授業外での回答を指示する方法とを比べれば、その回答率に大きな開きが生じることが予想される。また「紙」についても、「実施率 93%だが回答率は 34%」という某大学の教務担当者によるコメントは、授業外での回答および回収という方法を採っていることをうかがわせる。

(2) アンケートの実施回数とその時期

18 校のうち、13 校が本学と同様に年間 2 回という実施形態であった。なお年間 1 回のみ実施する大学が 1 校あるが、これは科目によって前期実施と後期実施を分ける方法によるものなので、実施時期としては年に 2 回設定されていることになる。4 回実施の大学は 4 校あり、いずれも前後期各 2 回の実施で、学期中 2 回のアンケートについてはそれぞれ内容を区別しているもようである。

(3) 授業アンケート質問項目の数とその内訳

質問項目の総数について、最も少ない大学では 5 問、最も多い大学では 26 問であった。詳細な質問数の分布を図 1 に示す。但し、これらは既定質問の数であり、本学と同様に独自の質問項目を追加できるようにしている大学もある。

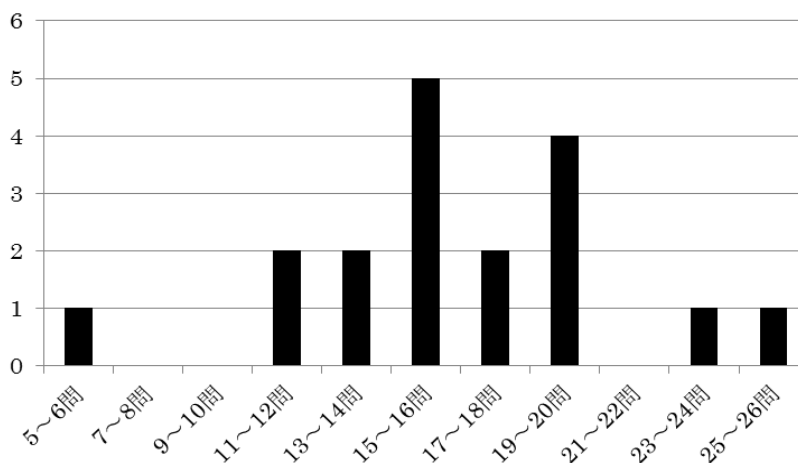
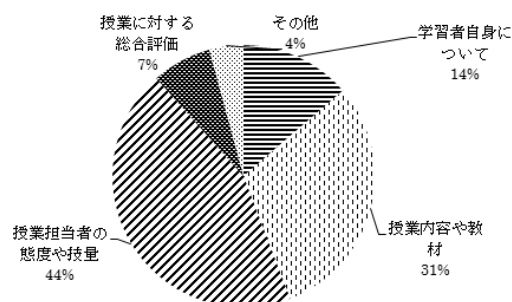


図 1 18 大学における質問数分布

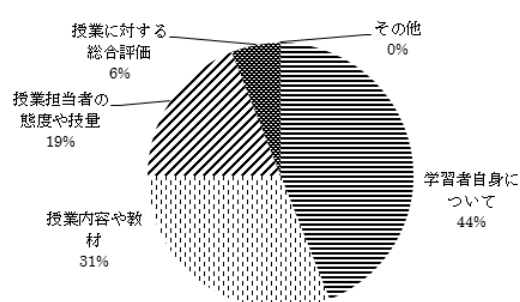
調査対象の量は必ずしも十分と言えないものの、質問項目数は概ね 11~20 の間が多いということ、現状 9 項目の本学は比較的少ない部類であると言える。

次に質問内容に目を向けてみたい。各大学のアンケートが設けている質問文は多種多様にも見えるが、その内容を仔細に検討すると、下のグラフ上に示す4項目、およびそのどれにも属さない「その他」の計5つの項目に分類できることが分かった。そこでいくつかの大学をとりあげ、内容別質問項目数の比率をながめてみる。グラフに付した数字は、アンケート各項目の質問数が全質問数の中に占める割合である。

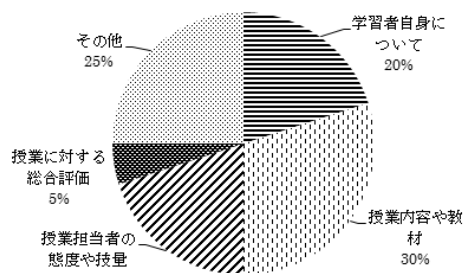
OG 大学



OS 大学



KE 大学



摂南大学

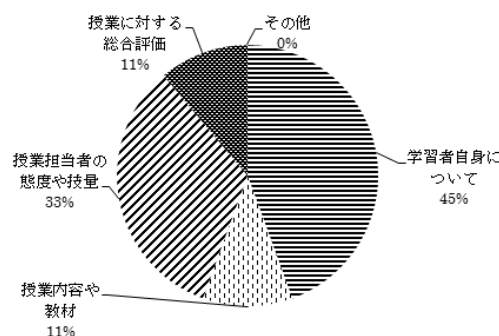


図 2 4 大学における質問内容の比較

OG 大学のアンケートを授業内容や担当者に関する質問に重点を置いたアンケートとするなら、OS 大学のそれは学習者自身に関する質問が半数近くを占めるという特徴があると言えよう。実習系の学部を持つ KE 大学で「その他」に分類される質問項目が多いのは、専門に関わりの深い質問が多いことによるものと思われる。また、「授業内容や教材」も他大学より際だって多く、具体的な質問内容を重視していることがうかがわれる。

本学の授業アンケートについて、質問項目の構成の上では「学習者自身について」に重点を置く OS 大学にいくらか近いタイプと言えそうである。

(4) 評価段階数

18 大学のうち 13 大学が 5 段階を採用しているが、4 段階のところも少数ながらある。また質問の内容によって段階数を使い分け、総合評価のみ 10 段階で他は 4 段階とする例や、学生自身に関するものが 5 段階で授業や教員に関するものが 3 段階と使い分けている例もある。

(5) 自由記述欄の指示方法

今回調査した全ての大学で自由記述欄を設けていた。質問の表現は大きく分けて 2 つ。「授業について意見を自由に書いてください」のように具体的な指示を行わないものが 4 大学。この中では「500 字以内」と字数を指定するものもある。他のほとんどの大学では「この授業のよかった点もしくは改善すべき点は何ですか」のように、「よい点」と「改善

してほしい点」を書くよう指示している。この中には、「授業をもっと理解しやすく、興味をもて役立つものにするため、具体的な提案や希望などを自由に書いてください」の例のように、不満な点を指摘するにとどまらず、具体的な改善方法を提案するよう促すものもある。

自由記述欄での暴言や中傷には各大学とも悩まされているようで、「お互いの信頼関係のもと、無記名でアンケートを行っています。根拠のない悪口や不適切と思われる意見は慎んでください」という注意書きを加えている大学も見られる。

(6) 回答者名

18 大学の中で全面的に記名式アンケートを実施している大学はなかった。ただし、半期のうち前半を記名、後半を無記名にするとか、担当者の判断で記名・無記名を使い分けるなど、部分的に記名式を取り入れている大学がある。

(7) 公開方法

各大学とも、紙媒体や Web による公開を実施している。ただし今回の調査では、冊子やサイトが学内に限定して公開されているのか、図書館や Web 上で誰もが閲覧できるのかについては明らかにできなかった。

(8) 回答者からの追加事項

各大学の授業アンケートにまつわる問題点などについて、今回の調査に協力してもらった教務課担当者にコメントを求めた。「来年度に向けて見直しを検討中」などその詳しい内容については触れていないものもあったが、下記の 2 件はいずれも複数の大学から報告された問題点である。

Web アンケートについて、その回答率の低さについて 3 大学から報告があった。「学内のシステムを利用して行っているが、紙媒体の時と比べると回答率は低い。2011 年度前期の回収率は 18.0%、後期は 13.0%」と具体的な情報を提供してくれる大学もあった。年間 4 回のアンケート実施に関する報告は 2 大学から寄せられた。いずれもタイムスケジュールに余裕がないとか、教師による実施率や学生からの回答率が上がらないなどの問題を抱えており、うち 1 校は、学期内 1 回目の「中間授業アンケート」を平成 24 年度以降は廃止したとのことである。

3. まとめ

この稿を執筆している時点ではすでに本学の授業アンケートの改訂作業が進み、上で行った本学と他大学との比較が正確さを欠くこともあるかも知れない。しかし、今回の調査によって、アンケートに用いる媒体や項目の量や配分、自由記述の扱いや記名式の導入などについて、多くの大学が悩みながらも模索を続けている現状が分かった。一方で、学生へのフィードバックを目的としたアンケートと授業改善に役立てるためのアンケートをそれぞれ別の内容と時期に実施するという取り組みや、記名か無記名かを担当教員が判断するといった例も見られた。これらは本学の今後の FD 活動を検討するさい、先行事例として参考にする価値があると思われる。

編集後記

いよいよリニューアルオープン！いいえ、授業アンケートの話です。新しいアンケートを「いいね」ととるか「変わらんなあ」ととるかは人それぞれでしょうが、ともかく新しくなります。ものが変わるには変える仕事をする人がいます。今回の FD ニュースではアンケートの改訂作業グループのリーダーとして有馬先生より巻頭言を寄稿いただきました。新アンケート完成にいたるまでの苦労が行間からにじみ出ています。ぜひご一読を。